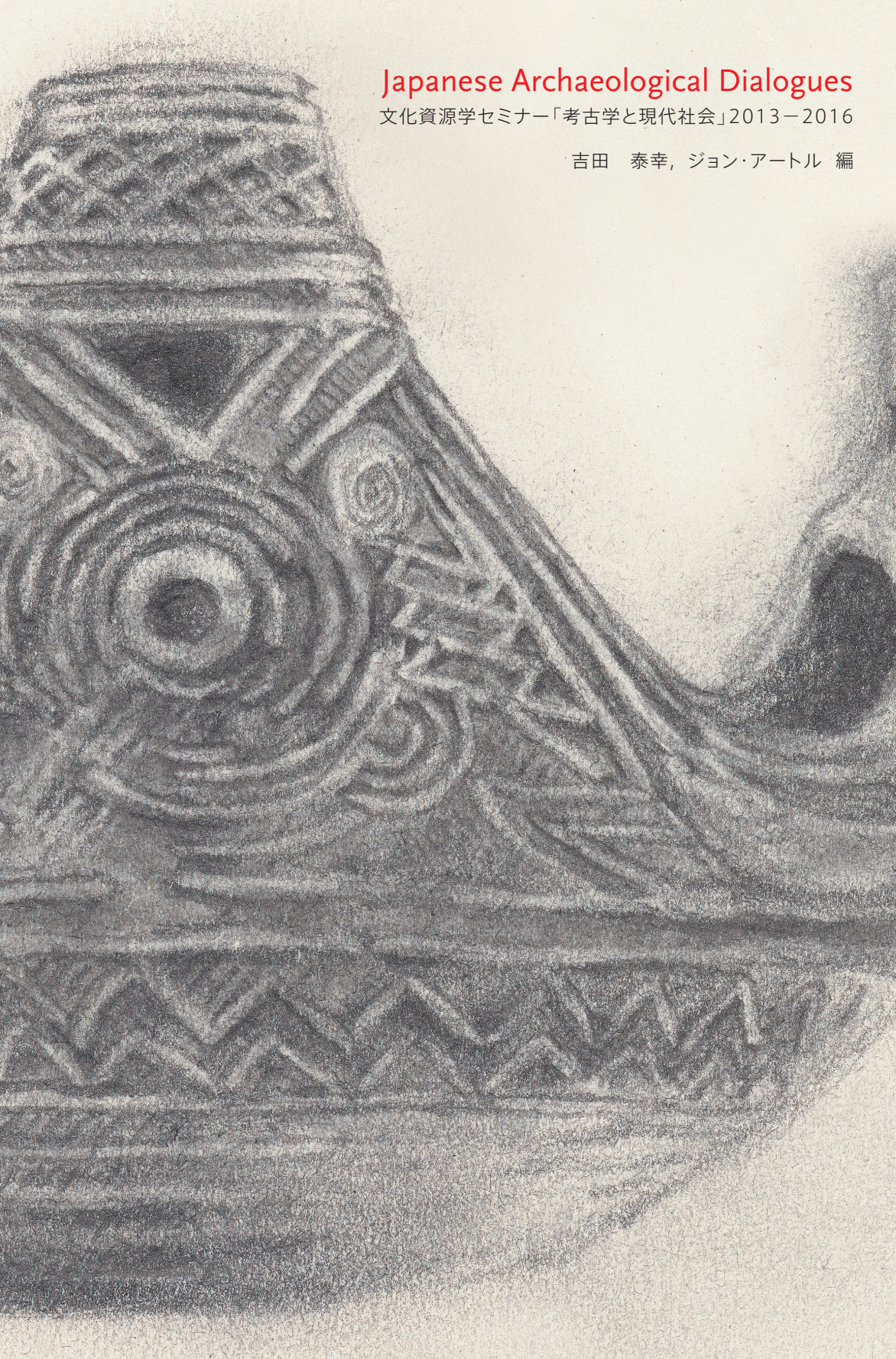
Japanese Archaeological Dialogues

文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013－2016

吉田　泰幸，ジョン・アートル　編



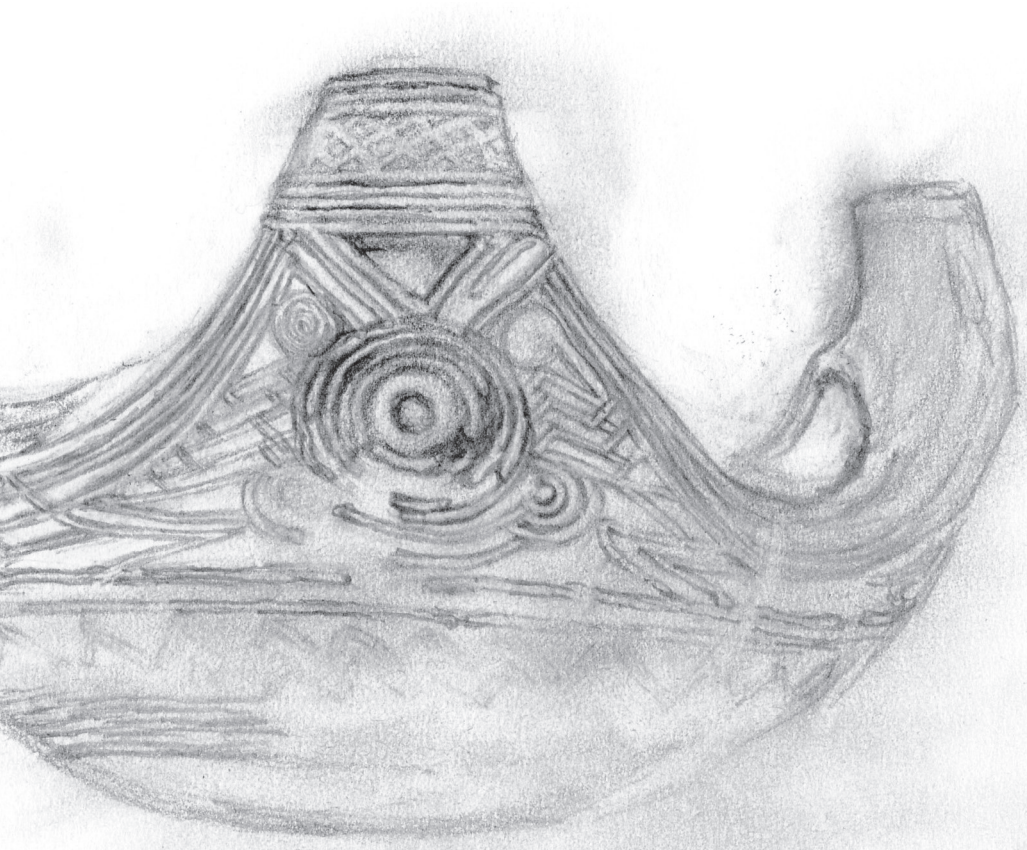
Japanese Archaeological Dialogues

文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013－2016

吉田　泰幸，ジョン･アートル　編

CCRS
Center for Cultural Resource Studies

金沢大学 人間社会研究域付属
国際文化資源学研究センター



© 2017
Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University
Kakuma-machi, Kanzawa,
Ishikawa 920-1192, Japan
All right reserved
Edited by Yasuyuki Yoshida and John Ertl
Distributed by Publishing Department of Noto Printing Co., Ltd
on acid-free paper.
Designed by Yasuyuki Yoshida and John Ertl
Cover page drawing by Sahoko Aki
Type set in 小塚明朝 Pro, AXIS, Minion Pro, Scala, and Scala Sans
First published March 2017 (Reprinted July 2017)
ISBN: 978-4-89010-716-2

科研費
KAKENHI
JP16K03219
JP17K01208

序文

学問をゆるめる

内科のはずなのに、心療内科の患者さんが次々に来る、不思議な医院がある。大人気の女医さんは、多くの人にカラダをゆるめる漢方を処方するそうだ。現代日本人の暮らしぶりは、カラダを硬くすることばかりで出来ていると彼女は言う。知らず知らず、硬くなっているのは、カラダばかりではない。当然、アタマも硬くなっている。考え方も、研究も、管理と効率という現代社会の呪文で、自身を縛りあげるばかりになっているのは、昨今の日本人ノーベル賞受賞者スピーチを思い出すまでもない。

そんなご時世に、このセミナーは、とりあえず空気がゆるい。

オーガナイザーのアートルさんと吉田さんコンビが醸し出す、よい意味で鷹揚な空気感は、コチコチな研究会に慣れた頭で来た人を、少しはイライラさせるのかもしれないが、概ね皆さんその空気を受け入れて、ゆるく会話を楽しみ始める。

某国立大学の尊敬する先生が、「ムダを無くすためのスピーチをさせられる」と言っているのを聞いたことがある。「ムダがなくなったら、いい大学ができるんですか？」私は即座に尋ねてしまった。感情や時間、エネルギーの、ある意味膨大なムダの堆積なくしては、芸術文化は育まれない。学問もまた、文化を創る働きではなかろうかと思うと、「大学からムダをなくしてどこへ行く？」という問いが、素朴に浮かんだのだった。

このセミナーがムダだと言っているのでは決してない。管理効率化、戦後経済復興の置きみやげは、国を豊かに見せはしても、一人一人に幸せをもたらすものでなかったことは、誰もが気づいている。柔らかに、のびやかに、知恵を編む文化が育ってこそ、生きる喜びに近づく暮らしがある。学問が、文化を牽引するつもりなのであれば、効率もムダもふくめて知的に楽しむ、開かれた力量を取り戻さなくてはならないと思っている人は多いはずだ。大学も学問も、もう少しゆるんだ方がいい。

私は一応アーチストの端くれとみなされているが、アートの世界でさえ、変な経済の歯車に巻き込まれ、売れた売れないの市場価値でのみ、社会に受け入れられている感もある。大学も、研究も、芸術さえもが抱えることになった息苦しさの中では、ゆるさを許すことは結構たいへんなことかもしれない。この会も、アートルさんが異邦人でなければ、もっと居場所がないものになっていたかもしれない。また、吉田さんという、非凡な受け入れ精神と現実的処理能力を備えたパートナーが彼に居なければ、やはりこの会が、ポテンシャルを落とさずに走り続けることは難しかっただろうと思う。

つまり、このセミナーは、カチカチからノビノビまでの文化資源研究シーンを俯瞰する、やや脱力系の異邦人的目線と、それを楽しみながら受け入れて、一応きっちりと場に収める周到さを備えた、稀有なパートナーシップの上になりたつ、なかなか珍しい議論の場ではないかと思う。文化人類学と考古学を軸に、ローカルにもグローバルにも、縦、横、斜めの時空を飛び回って「文化」を見つめ直そうとするその議論は、すそ野の広い、柔らかな、研究文化そのものの醸造の場と呼ぶに値するものでもあるかと、私は思っている。

安芸早穂子　考古学・歴史復元イメージ画家

目次

序文 v
謝辞 ix

序章　セミナーシリーズ「考古学と現代社会」は対話から生まれた
　　吉田　泰幸 1

1　縄文住居復元と史跡公園 13
　1-1　縄文時代の建物復元の方法と課題 : 岩手県御所野遺跡の事例から
　　高田　和徳 14
　1-2　考古学の多様性と縄文住居復元
　　ジョン・アートル 22
　1-3　対話：縄文住居復元と史跡公園 30
　1-4　「縄文住居復元と史跡公園」をふりかえる
　　吉田　泰幸 45

2　歴史復元画と考古学 55
　2-1　縄文人はどのように描かれてきたのか
　　吉田　泰幸 56
　2-2　縄文人をどのように描いてきたのか
　　安芸　早穂子 60
　2-3　なぜ「おしゃれ」な縄文人を描こうとしたのか
　　小山　修三 77
　2-4　対話：これから縄文人をどう描くのか 85
　2-5　「歴史復元画と考古学」をふりかえる
　　吉田　泰幸 107

3　現代「日本」考古学 117
　3-1　現代日本の考古学、社会、アイデンティティ
　　溝口　孝司 118
　3-2　日本におけるパブリック・アーケオロジーを考える
　　岡村　勝行 122

3-3　対話：現代「日本」考古学　126
3-4　「現代『日本』考古学」をふりかえる
吉田　泰幸　136

4　多様性・持続可能性と考古学　151
4-1　食の多様性と文化の盛衰
羽生　淳子　152
4-2　ジェンダー教育と考古学
松本　直子　167
4-3　対話：多様性・持続可能性と考古学　183
4-4　「多様性・持続可能性と考古学」をふりかえる
吉田　泰幸　199

5　さよなら、まいぶん　209
5-1　文化遺産を機能化する NPO セクター
赤塚　次郎　210
5-2　もしドラッカーが日本の「まいぶん」の現状を眺めたら
岡安　光彦　224
5-3　対話：さよなら、まいぶん　240
5-4　「さよなら、まいぶん」をふりかえる
吉田　泰幸　255

6　ハイパー縄紋文化の難点　263
6-1　縄文と現代日本のイデオロギー
吉田　泰幸　264
6-2　消費される縄紋文化
大塚　達朗　271
6-3　対話：ハイパー縄紋文化の難点　283
6-4　「ハイパー縄紋文化の難点」をふりかえる
吉田　泰幸　305

7　Reflections on Archaeology and Contemporary Society
ジョン・アートル　313

参考文献　329
あとがき　339

謝辞

本書の基となったセミナーシリーズにおいて、貴重なお話を提供していただき、テープ起こしのチェックの労にも付き合っていただいたゲストスピーカーの方々と、全てのセミナー参加者に御礼を申し上げたい。参加者が誰もいなければ、本書で重視した対話も何も発生しないからである。

金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター（以下「センター」）の藤井純夫、鏡味治也、中村慎一各先生にも特に感謝申し上げたい。

藤井先生は西アジア考古学が専門で、先生がセンター長だった時、ヨーロッパの大学・研究所を訪問した際に着想を得て、センター内に課題ユニットなるものを作ることを提案された。それによってアートルと吉田も自分たちを「考古学と現代社会ユニット」と再定義し、セミナーシリーズ第 4 回からは「考古学と現代社会」シリーズと銘打った。狭義の近代科学としての考古学に邁進し、ある意味求道者を貫くことができる非常に幸せな研究生活を送っている（ように見える）藤井先生からすれば、本書があつかう日本考古学、そしてそれをめぐる諸問題はせせこましく見えるかもしれない。とはいえ本書の成り立ちに大きな影響を与えた先生の一人として、深謝の意を表したい。

鏡味先生はセミナーシリーズを開始した当時のセンター長で、センターとして何か公開で研究会のようなものを開催したいと話しておられ、吉田が企画を持ち込んだところ、快諾していただいた。各回を包括する全体タイトルの「文化資源学セミナー」というのも、先生が何とかひねり出したものである。センター長である間は第 1 ～ 3 回のセミナーに参加いただき、文化人類学者の視点から貴重な発言もしていただいた。文化人類学ではあまり盛んではないと言われている物質文化の研究に乗り出している鏡味先生の研究にも、ものが人を動かす一例の考察としての本書がいくばくか役に立つことを願う。

中村先生は初代センター長で、人文系の学問が置かれた「危機」を常に広い視野で認識し、それを現行の制度の中でどのように持続させるかに腐心していると勝手に解釈している。あまりにもその手腕に優れていることから大学の要職にも引っ張られてしまったため、「最近全然勉強していない」ともこぼされており、本書を読む時間もすぐには取れないか、もしくはこの先も読むことはないかもしれないが、本来的には中村先生が好きで得意と思われる「勉強」の時間が取れれば本書にも目をとおすことを願わざるを得ない。そもそもセンターがなければ本書も生まれていない。感謝の意を表したい。

そのほか、以下の方々には本書に関連する文献のご教示、テープ起こし、読書会への参加、セミナー当日のアシスタント、広報への協力、金沢を離れ東京で開催したセミナー第 4 回の会場手配等々で多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい（順不同）。

渋谷　綾子、松田　陽、石村　智、瀬口　眞司、野口　淳、有村　誠、山藤　正敏、

山形　眞理子、秦　小麗、伊藤　梢、五木田　まきは、福井　理恵、小竹　望、荒井　恵梨子、井上　智恵子、酒井　悠香、間渕　明日香、遠藤　理子、梶間　周一郎、谷川　竜一、戸田　穣、野澤　豊一、松村　恵里、田村　うらら、碇　陽子、米田　洋恵、若林　典子